

教育的で実践的なツールとしてのTricefy —胎児クリニックでの導入事例—



User's voice vol.2

よりおか胎児クリニック

データ共有でアドバイスをすぐに受けられることは、
診断や説明に安定感をもたらします。
近い将来、周産期センターとクリニックがつながる
診療スタイルを実現していきたいです。



よりおか胎児クリニック
院長 依岡寛和 先生

学外への相談時に抱えていた、 データの容量や匿名性の問題

当院は2020年9月に大阪市の、あべのハルカスで新規開院しました。当院は胎児ドックを中心とした超音波診断検査や妊婦健診などの診療を行なっています。

Tricefy自体は、以前の勤務先の医院で、患者さまに妊婦健診で撮影した3D/4Dの赤ちゃんの顔などの画像を送信するために導入し、使用していた経緯があったので、その使い方についてはある程度知っていました。

大学病院や周産期センターでお仕事させていただいていた頃は、診断の難しい症例は、通常は院内の小児科、小児循環器科、小児脳神経外科医師らと緊密に連絡取り合っており、超音波室やMRI室に呼び入れて診断や説明を行うようにすることで対応していましたが、稀にそれでも診断に困るような症例が出てきた場合には、学外の専門医に相談することも行なっていました。その方法は、超音波データをメールで送信して結果を送ってもらうというものです。慣れればやりとりもできるのですが、容量や匿名性に関しては多くの問題を含んでいました。

システム導入不要でデータを簡単にやり取りできるTricefy

Tricefyはその点、病院間での安全性の高いデータ連携が特徴で、症例を送信する上で容量も匿名性に関する課題もクリアでき、セキュリティに関しては申し分ないと考えます。

ただ、大学病院では症例は多いがシステムがない、それに対し、前勤務先の個人病院ではシステムはあるが(異常の)症例が少ない。こんなジレンマに随分悩まされていました。ときおり心臓に異常が疑われる症例を見つけては、データを送信してアドバイスをいただくような運用を行なっていましたが、十分にシステムを活用しているとは言えないものでした。でも、この時にある程度集中的に取り組んだことで、今になってある程度安定的に運用する上での良い下準備になりました。

私が考えるこのシステムが特に有用なのは、大学病院のような大きな施設があって、かつ関連病院をいくつか持つ施設などではないかと思っています。基本的に送信する側がシステムを導入している必要がありますが、情報の受け手側には、インターネットの環境とスマホやパソコンなどがあれば、あとは特別な装備は必要ありません*1。

若い先生の力になるツールとしても期待できる

昔は、若い先生が独り立ちして出向先の病院や大学病院の妊婦健診外来を任せられるようになると、その先生に「何かあったらその日は誰々先生に相談するんだよ」とアドバイスしていましたが、それでは見落としなどに対しては、対応できる部分とできない部分があると思っています。

まず明らか異常を見つけた場合、このツールで適切なアドバイスをもらうことができますが、その場で説明ができなかったとしても、そもそも明らかに異常があることをその先生は認識しているので、そのことを患者さんに説明して、後日専門の先生の診察を受診していただくなど対応可能でしょう(もちろん両方同時進行でもいいと思いますが)。そして全く気づかない場合は仕方ないとして、最も効果を発揮するのは、正常か異常かの判断が微妙なときです。この場合、「自分の手技が下手でうまく断面が捉えられていないために異常に見えているのか、指導医にたずねた方がいいのか?」「様子をみておいていいものか?」「もしかしたらとんでもない異常所見かも?」「それを患者様に何と説明するのか?それとも説明しないのか?」など悩みますよね。

Tricefyは、特にそんな場合にコンサルできるツールです。患者様が帰られたあとに、離れた病院の医師や指導医にデータを送って相談をして、見る側は手が空いた時に所見を伝えることができます。そしてそれは同時に、いわゆる若い先生たちの超音波習得のための教育的な使い方にもなり、さらに上のレベルを目指すために活用することができそうです。



*1 閲覧者側はゲストユーザーでブラウザで利用することが可能なため、システムの導入は必要ない



担当者の引き継ぎ時もスムーズにでき、臨床にも役立つ

また、コロナ禍でもあり患者様の来院頻度を下げずに、かつ診断精度を下げたくない場合にも有用なツールです。心臓の異常が明らかであればその時には2次精査が必要になってきますが、コンサルしてみても明らかな異常がないようなら「このような場合は経過見ていいようだ」と、経験を積み重ねていくことで技術も向上していくことができるのではないのでしょうか。教育的ツールでかつ臨床に役立つ実践ツールになるといえます。

心臓の異常や出生後にductal shockなどを起こして緊急搬送しなければという症例は、なるべく早期に発見したいものです。個人病院はもちろんのこと、大学病院でも生まれて急変となると対応に苦慮することも少なくありません。外来担当医師が全員高いレベルを維持できる病院はいいのですが、当ツールを導入していればデータや情報の引き継ぎもしやすいので、人の入れ替わりがあってもある程度のレベルが維持しやすいかもしれません。

ツールでのコンサルは、専門医にとって安定感をもたらす

現在当院では、異常が疑われた患者様のデータを患者様の了承のもと、近畿大学小児科の小児循環器専門医である稲村昇先生にコメントを依頼しています。結果はメールで返信していただくので、次回患者様が来院される時までコメントを何度かやりとりしておき、その結果を患者様にお伝えしています。メールでコメントをいただき、明らかに異常が見つかった場合には2次スクリーニングにご紹介し、分娩する病院の相談という流れになります。

私自身、独立してからは、全ての症例で出生前の診断になるべく100%の診断に近づけるために努力しているつもりですが、人間のやることなので100%は難しいと思っています。でも、このツールで小児循環器専門医にコンサルして同意してもらうだけで安心になりますし、「画面に写っていない場所についても確認するように」などとアドバイスをいただく面でも利用しています。さらに、その予後や対応に対する知識も提供していただけるので、当院にとっては診断や説明に安定感をもたらすツールと言えます。

周産期センターとつながる、「いいとこどり」のクリニック診療へ

近い将来の理想の診療のイメージをいうと、「周産期センターでお仕事をしているつもりで個人のクリニックで診療を行う診療スタイル」を実現したいと思っています。ということかと言うと、周産期センターではリアルに専門医が多数いて助けてもらえるメリットは絶大です。しかし実際には、分娩や緊急搬送や手術などによる制約もあります。一方当院は、インターネット上で専門医と繋がりを増やしていけば、周産期センターで行っているような内容を取り込んだ診断をなるべく可能にして、かつ分娩や母体搬送の受け入れなどは行わないので説明が中断することもなく、説明の時間を確保できる。そんな、いいとこ取り的な診療スタイルも可能ではないかと模索中です。



撮影したエコー画像のデータをそのまま共有することができる

国内代理店

JTP JTP株式会社

〒108-0073 東京都港区三田3-13-12 三田MTビル4階

TEL: 03-6772-8088

<https://www.jtp.co.jp/>